

HPVワクチン承認に向けて

婦人科 池田加奈枝

何のことか、わからない人が多いと思います。

実は、人の皮膚にイボをつくるありふれたウィルスであるヒトパピローマウィルス(HPV)のある種の型が、持続的に感染していることが、子宮頸癌の発端なのです。

HPVの感染経路は性交渉で、感染はしやすいのですが、ほとんどは免疫力で排除されてしまい、持続的な感染は起こりにくくなっています、しかし、ごく一部の人に持続感染が起こり、子宮の入り口の細胞を徐々に悪性に変化させていきます。HPVの感染がなければ、この変化は起きないのです。

さて、今回承認されるHPVワクチンは、いくつかある悪性化を引き起こすウィルスの型のうちの、2つの型のウィルス感染を予防するワクチンです。全ての型用ではないので、日本人の場合は、効果は60～70%と見積もられているようです。ワクチンによる免疫が何年有効なのか、世界的にワクチン接種が始まってまだ数年のため、はっきりしたデータが出ていません。

対象は、初交前の女性(つまり処女)です。思春期前半の少女に、処女かどうかなどという質問はできませんから、適当に年齢で区切って実施されるようになると思われます。接種を受ける少女に対して、子宮頸癌検診やHPV検査は必要ありません。少女は筋肉注射を受けるだけです。

予防接種は保険がききませんから任意で、自費でとなりますが、諸外国では国から補助が出ています。接種は3回必要です。日本での料金は5万円くらいになるのでしょうか。

思春期前半の少女に、誰がその必要性を説明するのでしょうか。小児のポリオやBCGや麻疹の予防接種と同じ扱いで良いのなら、親がその必要性を認めて、任意に受けさせるようになるのでしょうか。

つまりHPVワクチンの普及には、小学校高学年女子のお母さんに、子宮頸癌の発生原因についてよく理解してもらうことが必要だということです。どういう機会に理解してもらうのでしょうか。

ふつうの婦人科医が、HPVについて一般の人に知らせるのにかかわれるのは、子宮癌検診を受診し、たまたま要再検査、要精密検査の結果が出た人に対してくらいです。子宮癌検診を毎年受けている人でも、異常のない人は、HPVのことを見聞きする機会はほとんどないと思われます。

防ぐ方法がある病気を防がない。これはもったいないです。まずは防ぐ方法を知りましょう。できることはしましょう。

HPVワクチン接種を受ければ子宮頸癌検診を受けなくていいのかというと、そうではありません。子宮頸癌を起こすHPVのすべての型に効果があるわけではないからです。

予防接種を受けた、受けないにかかわらず、初交から3ないし5年後、または20歳以降は、子宮頸癌検診を受けることをおすすめします。

